

割塚古墳発掘調査 現地説明会資料



石室奥壁背面の通路

1. 調査の契機と経過

割塚古墳は、大和郡山市千日町に所在する古墳時代後期の円墳である。

昭和 43 (1968) 年、宅地造成に伴い奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施し、横穴式石室や刳抜式の家形石棺、朝鮮半島に縁の深い垂飾付耳飾りをはじめとする豊富な副葬品が見つかった。調査後、古墳は公園内に保存され、昭和 53 年に大和郡山市の史跡に指定された。

大和郡山市では、古墳を適切に保存・活用するため、公園造成時の墳丘の整備状況や石室、石棺の保存状態の確認を目的に、令和 2 年度から継続的に調査を行っている。昨年度までに墳丘や石室、石棺の保存状態や構造を確認した。

今年度は、石室の構造をより詳細に把握するため、玄室奥壁および側壁の背面を調査した。

昭和 43 年調査時の成果

墳丘	円墳 直径約49m、高さ約4.5m ※現在 直径約42m、高さ約9.5m (公園整備で改変した形状)
埋葬施設	横穴式石室 (左片袖、下半部のみ残存) 玄室：長さ約6.6m、幅約3m 羨道：長さ約7m、幅約1.5m ※現在 羨道：長さ約3.5m、幅1.5~1.8m (公園整備で3.5m分を削平)
棺	家形石棺 (刳抜式) 長さ2.7m、幅1.5m、高さ1.4m
副葬品 (棺内)	鏡 (獣首神獣鏡) 1、垂飾付耳飾 2 対、水晶製切子玉35、碧玉製管玉11、埋木製棗玉・切子玉5、ガラス小玉10等
副葬品 (棺外)	馬具 (花弁形杏葉、f字形鏡板付轡、鞍金具)、挂甲小札、鉄鏃、須恵器
その他出土遺物	振り環頭、不明形象埴輪、弥生土器

2. 調査の成果

玄室奥壁の背面に通路が設けられていることを確認した。

この通路は奥壁のほぼ中央に位置し、石室の背後に向かって伸びている。2段目の積み石の頂部付近を床面とし、両側壁を石積みで構築する。幅は約1mあり、側壁は玄室奥壁から約3.5mの位置で途切れる。石積みによる側壁が途切れた先にも、石積みを伴わない通路が続いている。しかし、公園造成時に墳丘が削平された際、通路の延長部も削平されてしまったため、通路全体の本来の構造は不明である。通路内は、20～50cmの石を詰め込んで閉塞されていた。

通路の両側壁が途切れる位置には、側壁とほぼ直交する別の石積みが接続する。この石積みは、大部分が設置後に埋め戻されて墳丘の盛土に埋没するため、外部からは視認することができなくなる。

玄室の奥壁は、最終的にこの通路を塞いで構築したとみられる。したがって、石室の完成時には通路を視認することも、使用することもできなくなる。

また、昨年度の調査で玄室床面の石敷きは、石室の床面地下に施工された地業に伴うものであることを確認していたが、この石敷きが玄室の側壁背面よりもさらに広い範囲まで敷設されていることが判明した。

3. まとめ

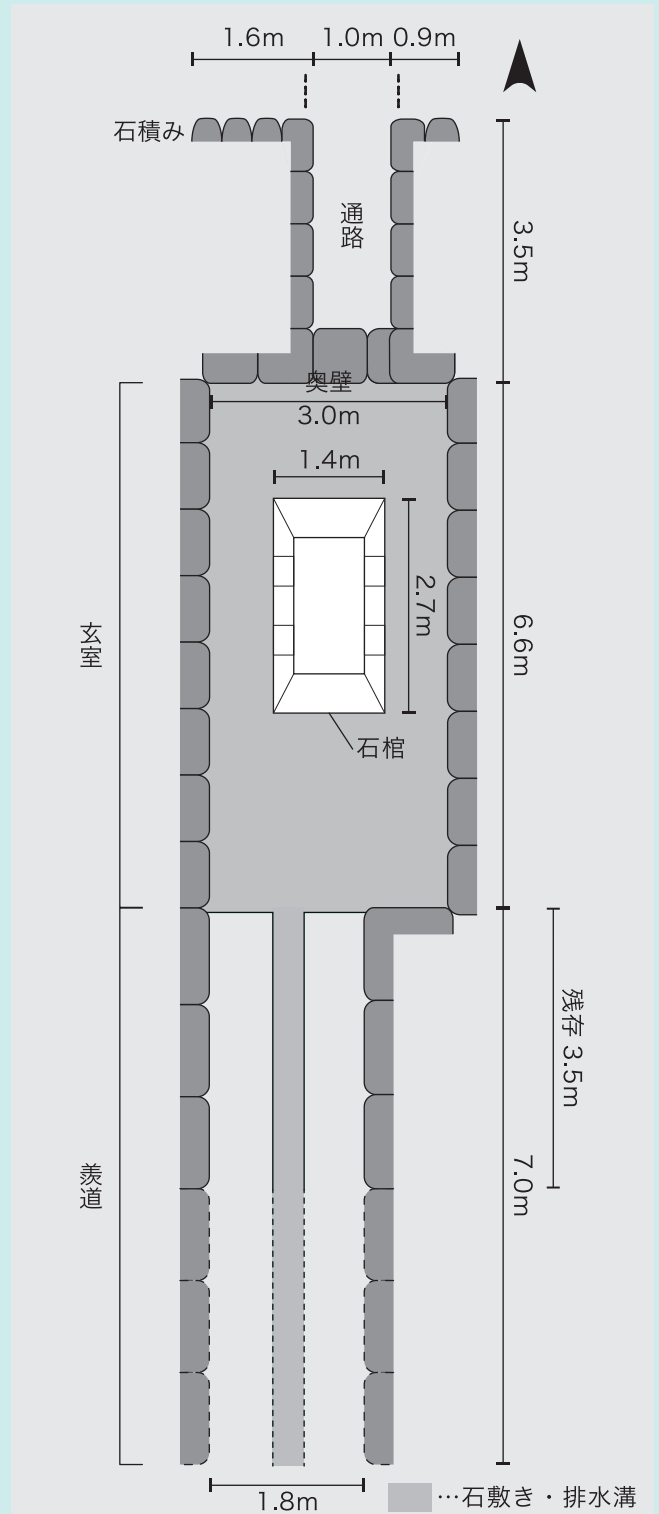
今回の調査により、割塚古墳の石室について、より具体的な構築方法を明らかにすることができた。

なかでも、全国的にも検出事例が少ない奥壁背面の通路を確認したことについては、その用途について検討課題を残すものの、大型横穴式石室の構築技法や葬送儀礼の実態を解明する上で重要な成果である。

また、石室の構築について、具体的な工程が明らかになった。構築手順としては、①墳丘の盛土→②石室設置墓壇の掘削→③玄室床下の石敷き・羨道部の排水溝の施工→④石室の構築→⑤土による石室床面の形成、となる。大型横穴式石室は室外の構造を調査できる機会が希少であり、床下や背面にわたって構築の具体的な手順を解明できた意義は大きい。



石室全景（南東から）



石室模式図

発行：大和郡山市

〒639-1198 大和郡山市北郡山町 248-4

TEL：0743-53-1151

2026年3月15日